天保元年前後(佐藤一斉の研究)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 佩刀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8761

天保元年前後（佐藤一斎の研究）

田中佩刀

一

天保元年（一八三〇）は、佐藤一斎が数え歳五十九の年である。此の年の蒻月念六日、つまり年の暮の十二月二十六日に伝習録欄外書が成っている。一斎は青年時代から陽明学を研究し、大学に関する著書も有るが、伝習録欄外書は一斎の王学研究のまとめと見ることができる。本稿に於ては、天保元年に至る間の一斎の大学研究を含む主な著述に就いての考察、及び天保元年の伝習録欄外書、天保六年の言志後録に就いての考察を、年月順に述べて見ようと思う。

一斎は、青年時代から陽明学に親しみ、伝習録を読み、大学を研究し、大学一家私言を始めとして、三種の大学関係の著作を遺している。一斎の陽明学は三十歳になる前から、「専ラ陽明ノ学ヲ講ジテ一家ヲナス。」（秋雨談）と評されていた程で、早くから陽明学者として頭角を現していた。朱子学の林家門人であり乍ら陽明学に打ち込んでいたのであるが世間も敢て其れを異としなかったように思われる。

天保元年前後の一斎の著述などに就いて概観しよう。

一斎五十二歳の文政六年癸未（一八二三）の九月には、白鹿洞書院掲示問の刻本ができている。又、此の年の暮までに言志録の稿が成っている。

七年甲申（一八二四）には、日本に初めて王文成の大学古本旁釈が輸入された。寛政年間に一家私言を書いた頃には、一斎はまだ旁釈を見ていなかった。此の年、渡辺崋山が文政四年頃描いたと見られる一斎の肖像画に、五十三翁として款記を書いている。

九年丙戌（一八二六）には、一斎は岩村藩の老臣の列に加えられ廩米十五口（後に五口の加賜あり）を賜っている。二月に一斎の三女鉉が津山藩士の昌谷碩（士儼）と結婚したが、間もなく病に罹って実家に帰り、八月に遂に亡った。一斎は其の悲しみを二首の詩にしている。其の中の一首は、「秋風驟至病難支。二十四年粱一炊。逝矣芳魂招不返。僊蛾宿在桂花枝。」という。十一月には、岩村神主祭式取調書を著した。

十年丁亥（一八二七）の九月には小学欄外書の稿が成った。

十一年戊子（一八二八）には、言志後録の筆を起した。又、一斎の主な詩を集めて愛日楼詩が編まれてゐる。

十二年己丑（一八二九）には、愛日楼文詩（文集と詩集とを併せたもの）の刻本が完成している。序言に拠れば三月ということになる。此の年の嘉平月つまり十二月の上澣には大学摘説（大学欄外書である）が、同月晦つまり月末には大学古本王文成公旁釈の稿が成っている。摘説と旁釈とは、同じ月の初めと終りとにできているが、両者とも何年間かの中に書き溜められたものを編纂したものであるから、短時日に書き上げたものではない。旁釈と、次に年代推定の略々可能な孟子欄外書との間に、中庸欄外書・論語欄外書の成立を推定すべきか否か、かつては其れを推定したにも拘らず現在の私は判断がつかない。

十三年庚寅（一八三〇）は十二月十日に改元して天保元年となった。文政十三年閏四月には、門人田辺淇夫が孟子欄外書を対校しているから、同書の成立は閏四月以前ということになる。又、言志録（須原屋板）が八月に刊行された。天保元年十二月二十六日には伝習録欄外書の稿が成っており、蔦月念六日、江都佐藤垣、大道、書於愛日楼南軒と同書

に記されている。

天保二年辛卯（一八三一）には済厥略記が成っている。

三年壬辰（一八三二）は一斎六十一歳、即ち還暦である。言志後録七十二章に曰く、「思未生時之我、則知天根、思方生時之我、則知天機。（天保壬辰十月念録。此日為誕辰。）」と。此の章を以て一斎の還暦の感慨と見ても宜しいと思う。

四年癸巳（一八三三）は、春王月中澣に、つまり一月中旬に易学啓蒙欄外書が成った。此の年、門人河田興に八女の紳を嫁がせて学問上の点も含めて後継者としている。俗簡焚余には、此の年に一斎が望月主水に宛てた「拙子何も陽明学と申すものには無之候。云々」の手紙や、大塩中斎（平八郎）に宛てた「姚江之書元より読候得共、只自己之箴砭に致し候のみにて、云々」の手紙などが掲げられている。

五年甲午（一八三四）の一月には、一斎の元日の詠が有る。曰く、「東軒朝読易、読罷一唫呻。雪砌冰初溶、煙庭草発屯。齢今丁既済、歓旧対家人。腔子須頤養、乾元不老春。」と。

八年丁酉（一八三七）の三月二十七日に、大塩中斎が自刃している。十二月頃、言志後録が成った。同書二百四十三章には「天保八年嘉平月朔、録。」とある。須原屋板の言志後録の刊記に天保六年六月の刊行となっているのは此の点からも不審である。

九年戊戌（一八三八）には言志晩録を一月から起筆している。即ち晩録の冒頭に曰く、「録起天保戊戌孟陬月、至嘉永己酉仲春月。」と。

十年己亥（一八三九）の十二月には近思録欄外書が成った。即ち蔦月中澣十日とある。

十一年庚子（一八四〇）の二月には呉子副詮が成った。即ち「春仲月上澣二日、識於愛日楼南軒、一斎居士」とある。

又、寛政十一年より此の年までの書簡文をまとめて、俗簡焚余二巻が成っている。　一斎六十九歳。

以上概観したが、此の間の社会情勢を見るに、外、異国の船舶が我が邦に来って開国通商を迫る気色が濃厚となり、内、例年の如く各地に百姓一揆が起り、また旱害による凶作と飢饉、地震、火災、或は米価暴騰など、極めて不安な様相を呈している。就中、文政十一年の越後大地震、天保元年の京畿大地震、天保七年の諸国大飢饉などは特筆さるべき事件である。然し、こうした事件と一斎の生活とは、余り関係が無かったように思われる。だが、一斎は「天資高邁、精力人に絶す。夙に経綸の大材を抱きしも、文儒を以て自ら居り、之を事業に施さず、挙世之を惜めり。」と評されている人物である。果して社会諸情勢に無関心であったか如何かは、遽かに断じ得ないものが有る。

先ず、青年時代から陽明学に志し、大学に強い関心を有していること、に就いて考えて見ても、政治というものに対して一斎が無関心であったとは思えない。更に、言志録及び言志晩録に見える政治論政治哲学論の幾章かは、右に挙げた社会諸事情を無視していない一斎の立場から生れて来たものであろう。

二

天保元年前後の一斎の著述等を概観したが、次に伝習録欄外書までの二、三の著述に就いて検討を加えようと思う。

文政六年の白鹿洞書院掲示問の刻本は未調査であり、内容を知ることができない。明治七年十一月に矢口泰の手で公刊された白鹿洞書院掲示（一冊）は佐藤一斎の訳と伝えられているが、此の書と右の掲示問との関係も未詳である。白鹿洞書院は睢陽・嶽麓・石鼓の三書院と併せて天下の四大書院と呼ばれたものの一つで、ここを復旧再興した朱子が掲げた学規が右の掲示である。従って、内容はたとえ未調査にせよ、掲示問が朱子学的内容であることは大体の想像がつく。

此の年に成った言志録は、一斎の最初の随想録で、人生観、政治論その他に、多彩な内容を持っている。

死生の問題に就いては、首章に人間の富貴・貧賤・死生・寿殀などは全て、一定の数(すう)の支配を受けているとする死生有命（論語、顔淵第十二）的な随想を述べているのを始めとし、十章には、

人須自省察。天何故生出我身、使我果供何用。我既天物、必有天役。天役弗共、天咎必至。省察到此、則知我身之不可苟生。

と述べて、無目的的な人間の生き方を否定している。又、百三十二章には

聖人安死、賢人分死、常人畏死。

とし、此の関聯事項として、百三十三章、百三十六章、百三十七章、百三十八章にも死を論じている。其の要点は、死生の権は天に在り、当に順に之を受くべし、ということである。こういう死生観はどこから導き出されるものか、現在の調査段階に於て断定することは避けるが、極めて儒教的な宿命観が其の根柢に在ることだけは認め得ると思う。

また、一斎特自の見解も述べられている点に注目したい。鎖国日本が諸外国の接触により、漸く近代へ目を開こうとする時期であり、洋学の興隆の見られる時期でもあるが、一斎がどれほど時代の推移を認識していたかは興味深い問題である。嘉永六年（一斎八十二歳）に亜米利加の国使（ペルリ）が日本に来た時に、幕府は林祭酒に命じて其の国書を和解（飜訳）せしめ、一斎が其の事を助けたという記録は、どんなことを意味するのか詳かではないが、仮に訳文の文章を修正するのみであったにしても、一斎の周辺に外国語の雰囲気が有ったことは確かである。弘化二年（一斎七十四歳）には古賀侗庵と共に阿蘭陀国へ送る幕府の書簡を作製したりしている。外国事情に就いてかなり知っていたのではあるまいか。時計を愛して記洋製測時器なる文章を綴る一斎である。近代科学の息吹きにも多少は触れていたと思われる。

一斎は「茫茫宇宙」（録、百三十一章）という表現を以て、此の世界を見ている。九十一章には、

人看月、皆徒看也。須於此想宇宙無窮之概。（乙亥中秋月下録）

とあるのは、やはり科学的な無窮之概ではあるまいか。更に百九十七章には、

人与万物、畢竟不能離地。人・物皆地也。今試且游心六合外、以俯瞰世界、但見世界如一弾丸黒子、而人・物不可見。於是思察、此中有川海、有山嶽、有禽獣・草木、有人類、渾然成此一弾丸。着想到此、乃知人・物之為地。

と述べている。これは人間も万物も地に生じ地に帰すという思想であるが、宇宙の観点に立って、弾丸黒子の如き地球（ここには地球が円いという知識が前提となっている）を傍観する態度に就いて言えば、やはり近代的と評してもいいと思う。こういう点で、儒教的宿命観に加えて、一斎独自の近代人的な見解が有ったと見られるのである。

死も生も天に委ねるというのが、一斎の基本的な死生観であるが、性或は人間の生命に関しての一斎の見解は中々興味深いものが有る。随想録の中からまとまった論を抽き出すことは難しいが、それでも一斎の見解を或る程度識ることができる。次に、言志録の中から、性或は生気に関聯した章を幾つか引用して見よう。

性禀諸天、軀殼受諸地。天純粋無形。無形則通。乃一於善而已。地駁雑有形。有形則滞。故兼善悪。……性之善与軀殼之兼善悪、亦如此。（百八章）

人不能無欲。欲能為悪。天既賦人以性之善者、而又必溷之以欲之悪者。天何不使人初無欲。欲果何用也。余謂、欲者人身之生気・膏脂・精液之所蒸也。有此而生、無此而死。……（百十章）

人身之生気、乃地気之精也。故生物必有欲。地兼善悪。故欲亦有善悪。（百十一章）

草木之有生気、而日暢茂是其欲也。……如人亦従軀殼之欲、則欲漏。欲漏、則神耗、不能霊也。故窒欲於外、則生気蓄於内、而心及霊、身亦健矣。（百十二章）

人能窒欲、則心身並得其養、亦如此。（百十三章）

学者当徳与歯長、業遂年広。四十以後之人、血気漸衰。最宜戒牀笫。不然、神昏気耗、徳業不能致遠。不独戒在少之時。（百六十章）

少壮人、精固閉而不少漏亦不可。神滞而不暢。過度則又自戕焉。……（百六十四章）

情之本体、即性也。則悪之本体、即善也。悪亦不可不謂之性。（二百二十六章）

不定而定、謂之无妄。宇宙間、唯有此活道理充塞焉、万物得此、以成其性。所謂物与无妄也。（二百四十一章）

……生固活也。死亦活也。（二百四十二章）

以上の諸例を見ると、一斎の述べる生命観は、儒教的宇宙本体観にも繋がるものであると考えられる。

百八章の引例は、一部分を省略したので筋が通りにくい様であるが、性は天から受けるもので、天は純粋で無形で自由で善であること。身体は地から受けたもので、地は複雑で有形で不自由で善と悪とを兼ね備えていること。この善悪を兼ね備えていることは、譬えば、風雨が万物を生育する反面、破壊する場合も有るのと同じことだ、としている。そうして、此れと同様だとして、「性は善なることと、身体は善・悪を兼ね備えていること。」を結論しているのは注目すべきである。

次に百十章は、人間の欲望に就いて論じており、天は人に善なる性を賦与しながら、悪の欲望を以て人の善なる性を濁らせている。然し、此の欲望は、身体の生気・あぶら・精液の所産であって、此れが有るから生きており、無くなれば死ぬのだ、としている。

百十一章は、其の欲望を更に説明しているわけで、人間の身体の生気は地気の精であるとし、百八章の立論から地は善悪を兼ねているので、欲望も善悪を兼ねているとする。

百十二章は、欲望の内容を具体的に指摘したもので、軀殼の欲とあるからには、此れを性欲と解さねばならぬ。欲を漏せば精神が消耗し、欲を貯えれば、生気が貯えられ心が霊妙に働き身体が健康になる、と言っている。百十三章も同じことを述べており、百六十章は右の理由から、四十歳以上の学者は房事を慎むべきことを説いている。百六十四章は少壮の人の禁欲生活は却って精神を渋滞させてしまうから、適当に漏らすべきことを説いているのである。

二百二十六章は、解釈上疑義の有る章である。情の本体が性であるということは、言志後録八十二章の「性之動為情。」という点からも納得できるが、則悪之本体、既善也は何から抽き出されて来るのか問題である。則の字が有るので、前文を条件として、性ナレバ則チ悪ノ云々と訓むのが普通であるが、私は寧ろ条件にはしない方が良いと思う。つまり、「情の本体は性である。悪の本体は善である。悪も性と謂わなければならぬ。」と解して、悪の本体が何故善であるかを検討すると、百十章に述べる如く、天は人に善なる性を賦与しているが、同時に欲望という悪も与えている。但し、此の欲望が有って人間は生きているのである。而して百八章に説く如く、善なる性を与えられている人間の身体には、善と悪とが共存する。つまり悪を有する本体である人間は、善なる性を賦与されているのであるから、悪も性の範疇の中に入れて考えられる、という事であろう。此の章の悪を欲望の意に解すれば、納得し難い論理ではない。

但し、二百二十六章に類似する言葉として二程全書巻一の、

善固性也。然悪亦不可不謂之性也。

とか、或は伝習録巻下の、

先生曰、至善者心之本体。本体上才過当些子、便是悪了。不是有一箇善卻又有一箇悪来相対也。故善悪只是一物。

などが有り、此の方は意味も良く通ずるのであるが、二百二十六章の方は則の一字の為に解釈に疑問が生じている。

二百四十一章の「不定にして定は之を旡妄と謂ふ」の旡妄は易の天雷旡妄を指している。天雷旡妄 ䷘ は（震下乾

上）という卦であって、妄仮無きこと、即ち至真至誠、天道運行の象を意味している。四時の推移は不定であるが、其の順序は定まっているのである。一斎は此の旡妄を活道理（物に旡妄を与ふるなり）と呼んでいる。そうして次の二百四十二章には、物・事も、生・死も、全て活動しているのだとしている。即ち旡妄なる活道理に従っているのである。言志後録の九十九章には、

古往今来、生生不息。精気為物、天地未嘗増一物。游魂為変、天地未嘗滅一気。

とあるが、此れは、生固活也、死亦活也の裏附けになる言葉であろう。

以上の一斎の生命観を要約すると、先ず人間の生死は天の支配を受けるものであるが、それは不定而定なる旡妄の活道理、つまり一種の法則に従っている。生死を超えて天が人間に賦与しているものが性である。そうして欲が有る状態が生で、欲が無い状態が死である。欲が有る状態の場合には肉体が有る。肉体は地から与えられたものである。従って地気の精を受けて生気が有る。地は本来、善と悪とを兼ねるものであるから、欲にも善と悪とが有る――と述べていることになるが、生と死、肉体と欲望というような問題に、善悪のような倫理観が入って来ている点で、極めて儒教的な生命観だと言えよう。

言志録に於ては、右に述べたこと以外にも、政治の問題や孝の問題などに就いて注目すべき所論も多いのであるが、ここでは省略する。又、言志録に於ける一斎の立場が朱子学か陽明学かという点に就いては、現在の調査段階では遽かに断定を下し難い。

三

文政十年丁亥九月には小学欄外書が成っている。小学は漢学に志す者の最初に読むべき書物とされていた（初学課業

次第）。小学は朱子の意を受けて劉子澄が編纂したものと言われているが、朱子学派に於てはやはり重んずべき書の一つであるように思う。小学欄外書の中で一斎は訓詁を主としているが、内容の批判をした箇所も有る。一斎の立場は概ね朱子学と陽明学とを折衷していると言って良い。なお小学欄外書に関しては、昭和三十八年刊の東京支那学報第九号（東大、東京支那学会）に拙稿「小学欄外書考」が掲載されているので、其れを参照して頂きたい。

文政十一年に一斎は言志後録の筆を起しているが、後録に就いてはもう少し筆を進めてから採り上げようと思う。

文政十一年から翌十二年にかけて愛日楼文詩四冊ができた。文集三冊、詩集一冊である。詩文にかけては定評の有る一斎であり、豬飼敬所も、

一斎愛日楼詩文集、昨年出候。定メテ御覧ト存候。当春一斎ヨリ日野公ヘ托シ、拙評ヲ乞候。先頃両三遍読候処、此人識見有レ之ノミナラス、文章ニ用ニ心力一ト見エ、議論確実、文詞典雅、本邦近儒之文ニハ、希有ト存候。云々

（豬飼敬所書柬集、巻二）

と評しているほどである。右には一斎の代表的詩文が集められているばかりではなく、資料的にも価値の有るものが集められているが、本稿では愛日楼文詩は扱わないことにしたい。

愛日楼文詩の刻本は文政十二年三月に成っているが、同年十二月上旬に大学摘説ができている。比れは一斎が青年時代に著した大学一家私言を改訂したもので、大学欄外書とされているものである。

大学は王陽明の伝習録の中に極めて尊重されているものであり、謂わば陽明学の教科書であるから、一斎も青年時代から熟読したものと思われる。大学一家私言も大学摘説も、陽明学の立場から著されており、特に私言にはかなり酷しい朱説批判が見られる。そうして陽明学派の諸註を引用しながらも、一斎自身の態度を持そうとしているように思われるのである。即ち一斎は徒らに朱説を批判するのでもなく、王説に盲徒するのでもなく、極めて公正な見解を執ってい

る。大学欄外書に関しては、昭和三十九年三月刊の明大和泉校舎研究室紀要、第二十六号（明大）に「大学欄外書の考察」と題する拙稿が掲載されているので、其れを参照して頂きたい。

四

文政十二年己丑十二月末日には大学古本旁釈が成っている。大学欄外書（摘説）より約二十日間遅れて成立している訣であるが、もともと両書とも長い時日をかけて執筆されていたもののように思われる。そうして、大学欄外書、大学古本旁釈と次ぎ〳〵に著した動機には、大学古本旁釈の一斎の序文に見える如く、文政七年に日本に渡って来た王陽明の大学古本旁釈を入手したことなどが考えられるのである。

大学欄外書と大学古本旁釈（以下旁釈と略称する）との大きな違いは、旁釈には大学の本文が収められていることである。頭註は両書に共通しているものもある。

旁釈は、現在までの調査では、写本と活字本との二種類が有る。

写本の方は和刻本と思われる「大学、附録大学問」（刊記無し）に序文五葉（筆写）を綴じ込み、王陽明の旁釈と一斎の旁釈補及び頭註を筆で書き入れたもので、先頃、東京本郷の古書肆Rより、

大学　付大学問　　一冊　五千円　　巻頭に佐藤一斎の「大学古本旁釈序」書入有。
又「愛日楼罫紙」を用ひ明細書入有。多分佐藤一斎の書入ならん

として売りに出たもので、現在は明治大学図書館の所有となっている。此の書の巻頭に綴じ込んである一斎の大学古本旁釈序と王陽明の古本序と計五葉の筆蹟、及び古本大学に加えられた旁釈と頭註の筆蹟は、筆者の調べた限りでは一斎の筆蹟の特徴と合致しない。序文五葉は愛日楼鈔本と欄外に記してある朱色の罫紙に書いてあるが、此れが一斎のみが

用いた罫紙か否か詳かではない。此の写本を「書入れ本」と呼ぶことにする。

活字本は、明治三十六年に活版印刷されたもので、南部保城氏編輯の啓新書院叢書の一冊として「大学古本旁釈」と題されている。此の活字本を「啓新本」と呼ぶことにする。

書入れ本も啓新本も、それぞれの本文の内題は「大学古本」となっており、書入れ本には其の下に「王文成公旁釈」と記し、啓新本では行を改めて「王文成旁釈」（公の字は無い）と記してある。即ち、この一斎の旁釈は王陽明の大学古本旁釈が日本では未見の書であったので、それを紹介することを第一の目的として著されたものらしい。又、大学問を附した経緯としては、一斎の序文に

錢徳洪曰、大学問鄒謙之嘗附刻於大学古本、而其跋載在東廓集。則鄒氏刻本、其有大学問可知也。余今重訂之、序、取文録所収者。旁釈、極為簡易、因亦僭補数条、除去李本附録、依倣鄒本、以大学問附焉。云々

とある。大学に大学問を附してあるのは、書入れを本を見れば分る如く、版本に始めから附録せられていたものである。従って一斎が右の序文に述べているのは、一斎も大学問を附録したという其の経緯を述べているのだと認められる。又、大学問は、一斎は若い頃から読んでいた筈である。何故なら一斎は伝習録欄外書の序文に、

余於此録、就三輪執斎刻本読之、歳月已久。云々

と述べており、此の三輪執斎刻本とは標註伝習録（正徳二年）のことで、同書には大学問が附録さている。

書入れ本では、筆写の序文が、大学古本旁釈序（一斎）・文成古本序字解（一斎）の順で、版本の大学古本序（王陽明）・大学本文・大学問・同跋の前に挿入されており、啓新本では、王陽明の肖像・王文成公画像清彭定求頌・王新建大学序・同序字解（一斎）・大学古本旁釈序（一斎）・大学本文・大学問・同跋の順に編纂されている。書入れ本には句読点を施してあるが、啓新本には句読点の外に返り点も施してある。此の返り点は編輯者の南部保城氏が施したものと想像される

書入れ本と啓新本とは細かい箇所で異同が見られる。例えば王陽明の大学古本序（王新建大学序と同じ）の頭註は啓新本には有るが書入れ本には無い。同序の終りの「正徳戊寅秋七月余姚王守仁序」の一句は、啓新本には無いが書入れ本には有る。

王陽明の大学古本序の一斎の字解を見ると、

不本於致知而徒以格物誠意者、吾謂之妄作、不取也。

と啓新本に記されているところは、書入れ本では、

……吾謂之虚罔不取也。

となっている。因みに、大学欄外書附録では啓新本と同じである。

右の程度の異同は約四十箇所程度見られるが、概ね伝写の際に見られる誤字・脱字の類と考えられ、内容的には書入れ本も啓新本も（註の有無を別として）大差は無いと言えるだろう。

頭註に就いては、啓新本には序文から附録に至るまで註が施されているのに、書入れ本では「物有本末」に就き二項、「楚国無以為宝」に就き一項の頭註が有るのみで、それも啓新本、大学一家私言、大学欄外書（摘説）に共通するものはない。

書入れ本の頭註は伝習録に拠るものであるが、啓新本の頭註は諸書に拠っている。此の啓新本の頭註に就き、或は編輯者の南部保城氏が施したものではないか、という一抹の疑惑は有るが、「曾子曰、十目……」の註は大学欄外書に共通し、「聴訟」「之其所」「不出家」「平天下」「争民施奪」の註も大学欄外書に共通している。従ってやはり一斎の頭註として扱って置こうと思うが、他日更に此の点に就いて検討したいと考える。

啓新本の頭註は、出所典拠の不明なものもかなり有るが、大学問に拠るもの、傳習録に拠るもの、四書問辨録（高拱）

に拠るもの等の他に、鄭維岳の知新日録に拠ったと思われるが徐巌泉の説をかなり引用しているのが目につく。

啓新本の本文の頭註を概観すると、先ず「大学」に就いては、大学一家私言の頃からと同じように、王陽明の言葉を引いて、大学は大人の学で、天地万物を一体とするものだとしている。

「致知格物」に就いては、やはり王説に従って、致は至、知は良知・是非の心、格は正す、物は事、であるとし、また大学の工夫は全て格物致知にあり、此れ即ち誠意のことであるとしている。此れも私言・摘説と同じであるが、物は事であるとしたのは私言・摘説には無かった見解である。なお大学問の頭註には王陽明の言葉を引き、格物致知から平天下までは、ただ明徳を明らかにすることで、親民にしても明徳のことである、と註し、或は正心誠意致知格物は、全て身を脩める所以のものであり、格物は脩身に力を用いる所のものであるとしている。即ち致知格物説は王説をそのまま踏襲していると見做し得る。

啓新本の大学問の頭註に、

傳習録陸澄録曰、澄、問学庸同異。先生曰、子思括大学一書之義、為中庸首章。

一斎子曰、大学首章、自大学之道至天下平。中庸首章、自天命至万物育焉。

とあるのは、大学と中庸との関聯に就いての王陽明の説を引き、更に大学及び中庸の首章を指摘しているのである。右の傳習録の引用文は、中庸欄外書の「全篇大意」の註に其のまま掲げられている。

ここで注意すべきは、一斎が大学の首章を指摘していることで、此れは大学一家私言・摘説（欄外書）には見られなかったことである。即ち、一斎の私言・摘説には分章は無く、旁釈には段落が有るのみで、其の段落が章であるとするならば、大学の首章は大学之道から此謂知之至也までなくてはならぬ。従って一斎が途中の天下平で首章を切ったことは特殊なことで、恐らく一斎は天下平までを首章として、其の首章に大学一書の義を見たと思われるのである。

一斎は私言に於ても、王説を根柢として、「大学一書莫要於誠意。」とし、「王子以誠意之極、為止至善。其功蓋与中庸之自誠身進於至誠同。」の如く中庸との繋がりを考えており、また「中庸誠身終於至誠、其功在明善。大学誠意極於至善、其功在致格。」とも述べている。更に、「楊氏時云、大学之脩身斉家治国平天下、其本只是正心誠意而已。」と註している。以上の見解は大学摘説に於ても略〻同じであり、例えば「誠意一段、是一書関鑰処。其功在致格、而極在至善。」とし、或は陽明の言葉を引いて慎独を註して「大学中庸之旨一也。」としている。此のような大学と中庸とを結びつけた点から、一斎が天下平までを首章とし、其の首章に大学一書の義を見、且つ中庸首章との関聯を考えたとしても肯けないことはないと思う。

大学古本旁釈を一斎が著した意義は、王陽明の同書の紹介並びに大学のテキスト出版ということでなかったかと思う。私言・摘説共に註のみであるのに反して、本文を掲げた所に第一の特色が有る。テキストとしては、他に一斎点の四書中の大学が有ると謂われているが、今の調査段階では其の内容が不明である。若し一斎点大学と旁釈とを比較することができたら、一斎の大学に就いての見解をよりはっきりさせる事ができるだろう。なお一斎点の五経中の礼記からは大学は省かれている。

五

昭和三十九年三月刊、明大和泉校舎研究室紀要所収の拙稿「大学欄外書の考察」の中で、大学古本旁釈の次に、中庸欄外書、論語欄外書、孟子欄外書の順に成立年次を推定したが、其の後の調査で中庸欄外書と論語欄外書とに就いてはやはり順序から外して未詳に入れるべきだという考えが強くなった。

孟子欄外書は文政十三年閏四月以前の成立であるから、傳習録欄外書よりも先に成立していることは確実である。一

方、中庸欄外書と論語欄外書には、成立年次推定の手がかりになるようなものは一つも無い。中庸欄外書には伝習録の引用が多く、他に高拱の四書問辨録など諸書からの引用が有るが、朱子語類など朱説の引用も幾つか見受けられる点が、かなり一斎の其れ迄の著書と比して目立つ特色である。論語欄外書も良知説などを引く一方では「陽明之説、似矯枉過直。」などという評も見えるのである。こうなると中庸及び論語欄外書は、伝習録欄外書よりも後に位置せしめる方が良いような気もして来る。従って中庸及び論語欄外書の成立年次は、現在の調査段階では未詳ということで、本稿では触れないことにする。

孟子欄外書（写本二冊）に就いても、内容が豊富であるから、別な機会に改めて検討したいと思うが、孟子欄外書では王陽明の説の引用は極めて少く、一斎の見解は今までの著書に較べるとかなり多く、そういう点で特色が有ると言える。

孟子の序説の韓子曰の第三条の註に、

余嘗曰、四書有道統之次序、有工夫之次序、又有書体之次序。以道統則宜以孔子論語為先。次曾子大学。次子思中庸。而孟子為後。以工夫則宜先読大学以定規模、次読論語以立根本、次読孟子以観発越、次読中庸以求微妙。以書体則論孟並各家全書、論語二十篇、孟子七篇、体例一類、宜存源流以置於前。庸学原係戴記内各篇、中庸在第三十一、大学在第四十二、体例一類、亦宜従表出、以附於後。要其所以四者、究竟原本於道統。

とあるが、此れは一斎の四書に対する見解としてはかなり詳しいものであり、、道統と工夫と書体と三方面から四書を体系づけようとしている点には注意していい。なお、一斎が八十歳の時に著した言志耋録（嘉永四年）の九章には、

四書編次、有自然之妙。大学如春、次第発生。論語如夏、万物繁茂。孟子如秋、実功著於外。中庸如冬。生気蓄於内。

と述べているが、此の大学・論語・孟子・中庸の順序は朱子の説に従っており、また春夏秋冬の展開と孟子欄外書の註の工夫之次序の展開の順序とを較べて見ると興味深いものが有る。

孟子欄外書では右の註を挙げて置くにとどめ、別な機会を俟って詳しく論ずることにして、次に伝習録欄外書に就いて述べようと思う。

六

傳習録欄外書（上中下三冊）は高瀬代次郎氏の「佐藤一斎と其門人」に拠れば、近思録欄外書（上中下三冊、天保十年）と併せて愛日楼読本欄外書第一函になっている由であるが、今日では明治三十年五月刊行の「王陽明伝習録・附佐藤一斎欄外書、上中下三冊」（南部保城編輯、啓新書院）に拠って広く読まれるようになっている。本稿でも啓新書院本を利用する。

傳習録欄外書上中下三冊の区分は、内容的には、傳習録・傳習後録・傳習続録ということである。そうして一斎が底本とした傳習録は、序文にも見える如く三輪執斎の刻本である。執斎の刻本とは正徳二年壬辰九月に成った標註傳習録上中下三冊及び傳習附録一冊を併せた四冊のことである。此の附録には、大学古本序・大学問・示徐曰仁応試・諭俗四条・客坐私祝・王文成公年譜節略・新刻傳習録成告王先生文（執斎）が収められている。

傳習録欄外書には傳習録本文が附せられているが、此れは他の欄外書と異なっている点で、一斎が本文を収録したと認め得る根拠に就いては、欄外書末尾の一斎の文を参照すべきである。即ち執斎刻本の傳習録の附録を省略した理由を一斎が書いているのである。

傳習録欄外書の底本が執斎刻本であった為に、執斎刻本の上巻に脱落している「持志如心痛。一心在痛上、豈有工夫

説閑話、管閑事。」の一章が脱落したままになっている。但し、此の章の脱落は別として、執斎刻本の他の諸本も一斎は参看していたようである。即ち、上巻の「愛因旧説汨没、始聞先生之教。云々」に就いて、

執斎以此条為跋、低書一格。然検諸本多平頭。但明儒学案、引此低書。

と一斎が記していることからも推測できる。

傳習録欄外書の註は、他の欄外書が概ねそうであるように、先人の註を多く引用している。又、傳習録中に見える学者の略歴を掲げている。従って、一斎自身の見解を述べている註は少いのであるが、大学欄外書などに比すれば、やはり傳習録欄外書は一斎の陽明学に対する見解がかなりはっきり窺えるので、二、三考察を述べたいと思う。

先ず傳習録上巻の「夜気是就常人説。云々」の註に

良心蔀動処是夜気、説之者畢竟不過為常人点示善端。学者既能致知集義、用功如此、則無非此気作用。至於聖人清明在躬、気志如神、那（不?）消従夜気説起。

とある。王陽明は孟子の夜気に就いて、此れは常人の場合のことで、学者は修行によって夜気と同じ気を保ち得るとしている。一斎の註は其れを解説したものである。

此れに関聯する下巻の「又曰、良知在夜気発的。云々」の註には

良知在夜気発的、謂良知在夜気上、恫然現出。（下略）

とあり、良知が夜気の上にあれば恫然と現れるものだと説明している。

孟子欄外書の告子上の牛山章の註には

夜気是略語。謂日夜之所息、平旦之気。

夜気不存処、即良心不存処。謂夜気不足以存良心、即支離。

とあるが、傳習録とは結びつけていないようである。

次に、誠意に就いて上巻「守衡問、大学工夫只是誠意。云々」の註に

大学文字、自粗入精。誠意固在正心之後。然就古本求之、則工夫之要、専在誠意。雖平治斉修、亦皆帰於誠意。故正心、則特指誠意中、体当心体処耳。幾亭乃駁此条、以為工夫顛倒。恐尚未免旧見。

と述べている。此れは誠意の中に心の本体を体得するのが正心であることを説いたもので、陽明の言葉を解説しているのである。

更に上巻「澄、問学庸同異。云々」の註には

天命之性、即明徳也。率性修道、即明徳親民之止於至善也。戒慎恐懼、即格致正修也。天地位、万物育、即治国平天下也。

と、中庸と大学とを結びつけて説明しているが、上巻「澄、嘗問象山在人情事変上、云々」の註では、鄒東廓の、大学は格致を先にし中庸は慎独を始めに掲げているのは何か、という問に答えた王陽明の

独、即所謂良知也。慎独者所以致其良知也。戒慎恐懼、所以慎其独也。大学中庸之旨一也。

を引用して、中庸と大学との聯関の説明としている。

そこで、良知に触れている註を幾つか拾って見よう。良知が夜気の上に在って炯然として現出する旨の註は先に引用したが、下巻「朱本思問、人有虚霊。云々」の註に

乾元之精、萃於人身為心、自其霊虚、謂之良知。故良知罩籠天地、聯絡万物、仁者以天地万物為一体、以此。

とある。此れは一斎が大学一家私言に引く「大学者、所学之大也。大人之学、以天地万物為一体。故謂之大学。」（徳洪の大学問に見える王陽明の言葉に基づくもの）の説明にも成るわけで、注目すべき見解である。

下巻「先生遊南鎮。云々」の註には

良知、即元気之精霊也。天地万物、非元気則不生焉。若草木之有生気、豈果為心外之物乎。云々

となっているが、此の元気之精霊も乾元之精も同じものを指していると解釈される。

別な説明としては下巻「先生曰、蘇秦張儀之智、云々」の註に

良知、是本然之知。私智、是形気之知。……譬諸日光、日光直照、皦然明白、此其本体也。日光先到水、水受之以倒照軒窓、揺動聚散、幻光不定。此失本体也。故良知本体、如直照之日光。云々

とある。日光の直射を良知に、反射光を私智に譬えて、良知が本然の知であることを説明しており、先述の良知の説明とは別な角度から良知を見ている。

終りに、至善に就いて一斎の註を見ると、先に引用したが、「天命之性、即明徳也。率性修道、即明徳親民之止於至善也。云々」という註が有る。此れは勿論、王陽明の、天命は性であり、性に順うのが道であり、道は即ち良知である（伝習録下巻）という中庸に基づく見解を踏まえた一斎の註であったが、もっと具体的な説明としては、下巻「問、古人論性、云々」の註が有る。即ち

性之本体、無善無悪者、指形而上而言。至於善悪可名、則已落於形而下。故無善無悪者、即所謂至善、而与物無対、是其本体也。云々

という註であるが、善悪の判断以前に性の本体である至善が存在すると一斎は見ている。

更に下巻「丁亥年九月、云々」の註には

無善無悪、是心之体、謂心之本体霊昭明覚。無善悪可指名、即所謂至善者也。……知善知悪是良知……為善去悪是格物、謂即物之善而為之、即物之悪而去之、便亦霊昭明覚者所為也。云々

となっている。此の註では、善悪の判断の無いものが霊昭明覚なる心の本体で、つまり至善であり、善悪を判断するものが良知であり、また善を為し悪を去ることが格物で、それは霊昭明覚なる心の働きであるとしている。ここに於て、先述の良知が元気の精霊であり、本然の知であることが、具体的に裏づけられるのである。以上、傳習録欄外書に於ける一斎の陽明学把握の内容を検討した。

七

文政六年に成ったと見られる言志録は、文政十三年庚寅八月に須原屋から刊行されている。伝習録欄外書の成ったのと同じ年である。此の言志録の次に一斎が著した随想録が「言志後録」である。

言志後録は、其の首章の文末に、文政戊子重陽録、と有るから文政十一年（一八二八）九月九日に起筆したことになる。そうして後録二百四十三章の文末に天保八年（一八三七）嘉平月朔録とあり、また後録の次の随想録・言志晩録が、天保戊戌孟陬月、つまり天保九年一月に起筆されているところから、後録は天保八年十二月中に成ったものと考える。

後録に於ても言志録と同じように、一斎の色々な見解が述べられているので、此れを一括して論ずることは難しいが後録の一つの特色として、人間の説明を易にもとづいてしている点を挙げることができる。この一斎の見解は天保四年春王月中澣（一月中旬）に成った易学啓蒙欄外書と無関係とは言い切れまい。つまり此の頃、一斎が易に興味を抱いていたということが想像されるのである。

天保三年、一斎は還暦を迎え、先に引用したように「思未生時之我、則知天根、思方生時之我、則知天機。」（後録七十二章）という感慨を持った。

後録七十八章に

天始気而地造物。天変而地化也。是知、造化二字語地功。不独人然地、而万物皆地也。云々

とあって、人のみならず、万物が地に属することを述べている。

後録五十七章に於ては、人間の身体を地天泰☷☰（乾下坤上）で説いている。即ち、人間の上体は陽、下体は陰で、上陽が下体に、下陰が上体に赴く形（上虚下実）が地天泰であるとする。又、身体の前面が陽、後背が陰で、前陽が後背に、後陰が前面に赴く形（前虚後実）が地天泰であるとしている。

又、五十八章には人間の身体の前面を陽、後背を陰とし、更に各々を三部分に分けて、それぞれ陽卦と陰卦とで説明している。その形を示すと次の如くである。

後背	坤☷	兌☱	離☲	巽☴	（陰卦）
前面	乾☰	艮☶	坎☵	震☳	（陽卦）

この陰陽が入れ代って前兌・後艮、前離・後坎・前巽・後震となり、前坤・後乾の形になると地天泰となる。

更に百三十二章には、震と巽との相感が気となり、坎と離との交りが精となり、艮と兌との合うことが形体となり、此の理が男女交合の理であるとしている。

又、百三十三章では、人間の肉体は水と火とが凝聚してできたもので、それ故に人間は水火が無くては生活し得ず、水と火との均衡が破れると生命の保持ができない、としている。此れは陰陽五行説に基づく様である。

以上は言志録の場合とは又異なった人間に対する見方であるが、こういう見方が抽き出されて来る根柢には、やはり儒教の合理的な解釈法が有ったと見て良いと思う。そうしてこういう解釈の上に、例えば二十七章の

物有栄枯、人有死生。即生生之易也。須知、軀殼是地、性命是天。天地未曽有死生、則人・物何曽有死生。死生栄枯、只是一気之消息盈虚。知此則通乎昼夜之道而知。

という一斎の死生観が有る。昼夜の道に就いては、伝習録上巻「蕭恵問死生之道。云々」の章に、王陽明が死生を昼夜に譬え、「此心惺惺明明、天理無一息間断、才是能知昼。這便是天徳。便是通乎昼夜之道而知。云々」なる言葉を述べた記事が見え、此の伝習録の記事と無関係ではなさそうであるが、王陽明の言葉は易の繫辞上伝第四章の「範囲天地之化而不過、曲成万物而不遺、通乎昼夜之道而知。」に拠っていると考えられるので、或は直接易から一斎が引いたのかも知れない。右の死生観を換言すると三十七章の「人生於地而死於地。畢竟不能離於地。故人宜執地徳。地徳敬也。云々」という見解にも成るのである。なお、其の他の後録に於ける問題点はいずれ改めて検討したい。

以上、天保元年前後の佐藤一斎の著述を年月順に追って、一斎の大学や伝習録の研究及び言志録と言志後録に就いて若干の考察を加えて見た。此の時期は一斎の陽明学の謂わば円熟期であって、本稿に扱った一斎の諸著にも陽明学の影響が少なからず窺われたのである。此の時期を通り越して陽明学的な色彩が失われて行くように思われるが、其れは今後検討して見たいと思う。

なお、私としては実は一斎の周辺の漢学界の動向に就いても書いて見たかったのであるが、最近の身辺多事と原稿提出期日を過ぎたという理由から果さなかった。（昭和三十九年十一月識）

〔附記〕佐藤一斎の年譜については、漢学雑誌「斯文」第四十二号（昭和四十年四月刊行予定）所収の拙稿「佐藤一斎先生年譜」を御参照頂きたいと思う、